

嵐

kanan

お昼休みになった。  
生徒たちの移動が始まる。

ここではほとんどの学生が、屋外で昼食を取る。  
温和な気候と文化、それに人々の習慣がそうさせる。  
私もその一人で、急いでペンと教科書をしまって、いつもの待ち合わせ場所へと向かった。

小走りで中庭にたどり着くと、お弁当を広げている2人を見つけた。

「遅いよー」

と先に声をかけてきたのは、ダルシャナートだ。

「もう食べてるんだからいいじゃん」

口を尖らせて少し不機嫌そうに言うが、

ダルシャナートは気にする様子もなくサンドイッチをパクパク食べ続けている。

座る場所を決めて埃をそっと掃い、腰かける。

「いつものことですし・・・はい、おしぼりどうぞ。」

笑いながらおしぼりを渡してくれる彼女はミフレール。

いつも3人で、中庭のクコの木の傍に集まるのだ。

「もう、ミフレールは待っててくれてるのに、よく一人で先に食べられるよねっ」  
そっけなさ過ぎるダルシャナートの態度に続けてぶーぶー言うしてみる。

「だってお腹空いてたんだもーん」

またしてもそっけない。その上食べる手を止めない。呆れる私。

そんな様子をくすくす見ているミフレール。

性格は3人ともバラバラ。だからこそ一緒に居るのかもしれないけれど。

お互いにお互いのないところを求めて。

ここはミフェランケット高等魔法学校。  
文字通り、魔法の勉強をするところだ。  
学生の約8割が女性。  
曰く、魔法というものは女々しい学問らしい。

・・・失礼な。  
ここには頑張っている人しか居ないのに。

女性が多いのにいくつか理由はあるが、それは特に問題ではない。  
魔法を学問として学ぶには、  
“魔力という持って生まれた資質が必要である”ことが重要なのだ。  
だから、ある意味入学試験はとてもシンプルだ。  
基礎知識の試験、そして魔力診断。  
魔力規定は、「Lv3以上のものに限る」こと。

この国で、魔力を持っていない人はいないと言っていい。  
(これまでにLv0の報告例はないという意味で)  
大抵の人がLv1や2の能力を持っていて、しかし3以上のものになると一気に限られてくる。  
魔法学校の規定はそこを基準にしている。  
Lvは10までに区切られていて、魔力3以上のものの大半がLv4~6である。  
Lv10のものは、過去にも片手で足りるほどしか存在しなかった。

まあ要するに、魔法使いになれるのは「選ばれた存在」であり、Lvの高いものは崇拝される、ということだ。  
私たちはそんな風に扱われる、魔法使いのヒナである。

「ふー。頭パンパンだあ。」

やっとお弁当を広げ、食べ始めながら愚痴をこぼす。

「先ほどの授業は何でしたの？」

「薬草学。」

「げっ、薬草学ってモーヴィラス先生だっけ？」

「うん、そう。」

「？ どのような方ですか？」

「えっとね、なんかこうもそもそーっと喋ってて、しかもちょっと早口で、キーワードっていうか・・・単語？を黒板にどンドン殴り書きしてく感じの人なんだけどね・・・。」

うんうんと横からダルシャナートが激しく同調する。

「あら、そうですの・・・。それは・・・大変ですわね・・・。」

ミフレールは、後半ごによごによと、苦笑しながら言葉が詰まっていく。

「でもルイ、薬草学って成績トップなんでしょ？ よくやるよねーあんな授業なのに！」

あ、ルイというのは私の名前だ。

「うへへー、それしか取り柄ないんだけどさっ！」

半分照れつつ半分得意げに笑う。

「だって、魔力もLv5だし・・・。ダルシャナートはLv7でしょ？ Lv差2は痛いよー。」

「んふー、もうすぐ8なんだ！」

右手を大きく突き出してピースして、にししと至極嬉しそうに笑う。

ダルシャナートのそういうところは、全然嫌味に感じない。

「マジで?! それってもう教員レベルじゃん!! 凄いなーいいなー。」

「あら、わたくしなんてLv4ですわよ？」

ミフレールが拗ねた様子ではなく、励まそうとしてくれているのが伝わってくる。

「うん、いや、そうなんだけどねー。そんなに簡単に上がるものでもないし。

そういえば、ダルシャナートは午前の授業は？ また実技？」

「うん、そうー！ それがもうくったくたなんだけどさー、午後からも・・・」

お昼休みは、いつもこんな風に過ぎていく。

2時間という時間は、あっという間だ。

午後の授業のために移動しながら、私は昼休みの話を思い出していた。

「・・・。Lv8、かぁ・・・。」

思わずぽつりと独り言が漏れてしまい、はっと周りを見渡す。

良かった、誰も聞いてはいないようだ。

誰もが高いレベルに憧れるが、そもそも魔力自体が持って生まれた能力なので、なかなかレベルアップということは難しい。

入学したときのまま、一生同じレベルの人も珍しくない。

上がったとしても、Lv1がザラだ。

ダルシャナートは、入学した時点でLv7の能力を持っていた。

期待と注目の的だったが、彼女自身がそういう体裁をあまり気にしない人なので、徐々に取り巻きも減っていったし、いちいち騒ぐものも居なくなった。

私やミフレールのように、仲良くなれば自慢してくるのだが（笑）。

「もうすぐ8」というのは、授業が早く終わったために、昼休みが始まる前、自分で魔力を測定しに行ったらしいのだ。

魔法学校に入学すれば、誰でもいつでも自分で魔力を測定できる。

校長室の傍に、いかにもというように置かれている、オパールのように少し白濁して、だがどこまでも透き通って見えるような、手のひらほどの丸い石にそっと手をかざす。

たったそれだけ。

少し経てば、石がサーモグラフィーのように、自分の能力を色で示してくれる。

入学試験にも使われ、その後こうやって解放されているのだ。

私も行ってみようかな、と校長室のほうへ足を向けかけて、

やっぱり変わらない結果を見てため息をつく自分が想像できて、大人しく教室へと向かった。

やだなあ、次は苦手な魔法科学だ。

魔法学校では、基礎授業以外は選択方式になっている。

自分の好きな科目を受けることができる。

自分の興味のある科目や、属性に沿った科目を選択することが多い。

魔法使いは基本的に、四大と同じ4属性に分かれる。

火、水、土、風のどれかだ。

性格にも表れやすいし、魔力の強い人であれば簡単に判断できるものである。

生徒はみな、入学時に校長によって属性を告げられる。

ごく稀に、属性を示さないものも居る。

・・・私は、その「ごく稀」な一人だ。

「魔法学校に入学」、イコール「魔法使いとして新たに生まれる」、という考えが昔から存在するため、入学式は洗礼の儀式も兼ねている。

一人ひとり校長に洗礼を受けた後、属性を伝えられるのだが、私が洗礼を終えて目を開けると、校長は目を細めて厳しい顔でこちらを見ていた。

一瞬作法を間違えてしまったのかと慌てていると、静かに手で制止された。

校長はゆっくりと目を閉じ、そして開き、

「あなたの属性は定かではありません。 ですが、あなたには水が向いているでしょう。」

そう告げられた。

属性を示さないものは、通常風属性に含まれる。

それなのになぜ「水」と言われたのか分からず、しばらくは混乱していた。

しかし学校生活を送るうちに、

「確かに私は水に向いている、というか水属性なんじゃないか。」と思うようになってきた。

校長に間違いはなかったようだが、それならなぜ無属性と言われたのかがまた謎だ。

風と水の間くらいだったのだろうか？などと一人で考えをめぐらせても、答えは出ない。

なにせよ、水属性として頑張っていかなきゃ。 そう思うしかなかった。

属性にこだわる必要はないのだが、やはり仲間意識のようなものはある。  
それに、同じ方向へ向かうということは、将来同じ職種へ就く可能性も高くなる。  
例えば、火属性は攻撃魔法中心なので、要人の護衛や治安維持に関わるもの。  
風属性は呪文魔法中心なので、新しい呪文の開発や、古代魔法の解明。  
全てが属性に沿うわけではないが、自然とそうなることが多い。

私たちの出会いは、まだほんの1年ほど前のこと。

入学して間もないころ、ダルシャナートのナンパから始まった（笑）。

私は無属性なのに、水へと言われたことで悶々としていた。

そこへ、ダルシャナートはミフレールを連れて声をかけてきた。

ミフレールは、見るからにお嬢様で、物腰が柔らかそうで、ふんわりしていて。

そういう雰囲気をもっていないダルシャナートは、

「この子可愛いー！」な勢いで声をかけたそうだ。

そして私は。

無属性なのに水属性に振り分けられた、異色もの。

「なにそれ珍しいー！どんな子なの？！」な勢いだったそうだ。

それだけで行動へ移せる彼女には、ある意味尊敬してしまう。

まあ、彼女には彼女なりの悩みもあったのだが。

Lv7のダルシャナートは、放っておいても取り巻きができた。

だがその誰もが、レベルの高い人とお近づきになりたいだけの人だった。

自分をよく見せようとするばかりで、本音はちっとも見えてこない。

そして、取り巻き同士はお互い腹の探り合い。

皮肉にもダルシャナートはこの時点で、「自分からは近づいてこない人と付き合おう」と思うこととなった。

私は本来、ダルシャナートのような人とは関わることはないだろうと思っていた。

ただ異色なだけで、特にレベルが高いわけでもない。

突然声をかけられたときは驚いた。

何だかんだと言いつつも、私は彼女に、彼女の性格に感謝している。

入学してから不安の塊で、どちらかという人見知りな私。

今この学校生活を楽しく送れているのは、ダルシャナートとミフレールのおかげだと思っているから。

その日もいつもと同じように、お昼休みを3人で過ごしていた。

入学してちょうど1年が過ぎ、新しい入学生がやってくる日だった。

3人で食事を始めようとしていたとき、

「お姉さま」と、声をかけてきた女の子が居た。

「あら、ナヴィーン。もう洗礼の儀式は終わりましたの？」

どうやらミフレールの妹のようだ。

同じふんわりした雰囲気と、ストレートの長い白銀の髪が、二人が血縁であることを感じさせる

。

「えっ？なにになに、ミフレールの妹なの？！」

今にも食いつきそうな勢いでダルシャナートが身を乗り出す。

「ええ、わたくしの妹で、ナヴィーンと申しますの。今年入学したのですわ。

お二人ともよろしく願いたします。」

にっこりと笑って、ミフレールが妹の紹介をする。

「初めまして、ナヴィーン・エルウィスと申します。

ミフお姉さまからお話は伺っています。ルイ・キャンベラさまとダルシャナート・プロベネシドさまですね。」

こちらにもにっこりと笑って、スカートを軽く持ち上げ、挨拶をする。 なんとも可愛い。

「わー！かーわーいーいー！！」

「ダルシャナート、落ち着きなよ。」と、飛びつきそうなダルシャナートを抑える。

「初めまして！私がルイです。ルイさまだなんて。。 ルイさんとかルイちゃんでもいいよ。」

「は、はい。ではルイさんとお呼びしますわ。」と、少し恥ずかしそうに頬を赤らめてナヴィーンが笑う。

「私も、ダルちゃんとかでもいいよー！」と、いつものノリで言う。

「で、ですが・・・」と、ナヴィーンが更に赤くなる。

どうやらそんな軽いノリには慣れていないようだ。

「っていうか、ミフレールってミフって呼ばれてるの？私もそう呼んでいいー？

ずっと長いなーって思ってたんだよね！ ルイは短いからいいけどさ。」

なんだかちょっと小馬鹿にされた気分でムツとする。

「ちょっと、もう少し言葉選んでよー。私はルイって名前気に入ってるんだよ？」と睨むと、

「あ、ごめんごめん。」と、苦笑する。本気なのが伝わったらしい。

そして話を元に戻し、

「んー私はねー。あ！ やっぱりダルちゃんよりシャナちゃんがいいや！なんか可愛くない？

ルイもミフもシャナって呼んでー」

と、自分であだ名を決め始めていた。



一通りあだ名騒ぎが治まったところで、4人でお昼を食べることになった。

ミフ、シャナ、と2人は短くしてみたが、ナヴィーンはシャナがあれこれ言うのに赤くなるばかりで、

結局ダルシャナートも諦めて「ナヴィーンって呼んでいい？」と言うと、

ホッとしたように「はい」、とにっこり笑った。

あ。またダルシャナートって言ってしまった。

慣れない。でもシャナに怒られる（笑）。 シャナ、シャナ、よし。

ナヴィーンは、シャナに色々にあだ名を言われている間、

幾度か困ったように、ミフのほうをちらりと見て助けを求めているように見えたが、

ミフはにこにここと笑って様子を眺めているだけで、一切口出しはしなかった。

ほんわか優しいだけのように思っていたが、意外にも厳しいのかもしれない、と、

ミフの知らない一面を垣間見たように思った。

ミフの笑顔が、「自分のことなんだから自分でなんとかなさい」と言っているようにも見えた。

そしてその様子には、シャナは全く気付いてはいなかったけれど。

4人には増えたが、雰囲気はいつも通りで。

談笑しながら、そろそろ昼食を食べ終える頃だった。

ふと、どこからか

リーーン—————。

まるで波紋が広がるように。鈴の音（ね）にも似た、透き通った音がした気がした。

それはとても心地よくて。身体全てに染み渡るようで。どこか懐かしくも感じるような。

「ねえ、なんか今鈴の音が・・・」

と3人に訴えようとしたそのとき、私たちが居る場所から少し離れた、中庭の入り口付近で一人や二人ではない女の子の黄色いざわめきがした。

そのざわめきは一気に広がり、悲鳴にも似た声すら上がった。

私たちも何の騒ぎかと、その中心に目を向けた。

そこには、すらりと背の高い黒髪の、痩身で、だが長袖の服の上からも鍛えた四肢なのがうかがえる、

美男子という言葉がこれほど似合う者が居るものかと思うような、青年が、居た。

彼は周りを見渡すと、こちらへ向かって歩いてきた。

「ちょ・・・っと、え、こっち来る?!」とシャナが少し慌てる。

目が合った私は、もう見とれるしかなかった。

そして私たちの傍で足を止めた彼は、少し微笑んで

「ルイ・キャンベラさんですか?」と、私に名を尋ねた。

「・・・はえ?」

ぽかんと開いた私の口から、とても間抜けな声が出た。

慌てて自分の口を両手でふさいだ。恥ずかし過ぎる。

「ちょっと、ルイ！ この人知り合いなの？！」

視線を青年から離さず、ひそひそとシャナが話しかけてくる。

知ってるはずない。知ってたらあんな間抜けな声なんか出さない。

こんなカッコいい人、会ってたら分かるに決まってる。

そう思いながらも、口には出せない。目の前に本人が居るのだから。

「え、あの、えっと……。どちらさまでしょうか？」

少し声が上ずったかもしれない。さっきからぐだぐだだ。

黒髪の青年は、しゃがんで目線を同じくして、やはり先ほどのほほえみを崩さず、

「初めまして、僕はスタッフ・エリックウィードと言います。

サンストレーゼ校長にご紹介を受けてきました。学校を案内してくださると。」と言った。

「「マダムが？」」

私とシャナの声が重なる。

マダムとは、校長の呼び名だ。

そんなの聞いてない。案内？なんで私が？というか私も入学して1年なんだけど。

訳が分からず頭がぐちゃぐちゃになる。

すると絶妙のタイミングで、青年、いや、スタッフのすぐ隣に金色の光で魔法陣が現れ、そこに半透明のマダムの姿が映し出される。

「ルイ・キャンベラさん。申し訳ありません、急にこのようなことを頼んでしまって。

スタッフ・エリックウィードは、私が知人からお預かりして、

この魔法学校へ編入ということになったのですが、なにぶん今手が離せなくて。。

あなたならきっとうまくやってくれるだろうと思って彼に紹介したのです。

彼の授業もあなたと同じものを選択という形にしていますので、

普段通りの生活をしていればよろしいわ。彼を頼みましたよ。」

それだけ言って、マダムの虚像は消えてしまった。

きっと私と出会えれば発動するように、彼の何かに魔法を仕掛けていたのだろう。

それにしても……。

一連の出来事を、中庭に居た生徒のほとんどが目撃している。

好奇の目でじろじろとなめまわされる。

ダメだ、どうしていいか分からない。

いや、普段通りって言われたけど……。こんなのってないよ！！！！

頭の中はパニックだった。

「えっ・・・と。」

次の言葉が浮かばない。

というか今まで同年代の男の人とまともに喋ったことなんてあったらどうか。

男性恐怖症とは言わないが、何しろ人見知りはするほうだし、男の人は苦手な方である。

落ち着け。とりあえず、何から話したら・・・。

「あの、そこにしゃがんでるのもなんですし、とりあえず座りませんか？」

と促してみる。

「ここ、どうぞー！」

と、いつもの調子でシャナが勧める。 さすがだ。

だが、勧めた先は私の隣で、余計に緊張しそうだが、そんなこと言ってる場合ではない。

緊張が伝わったのか、ミフが助け舟を出してくれる。

「エリックウィードさん、とお呼びしてもよろしいですか？」

お昼は召し上がりまして？」

と、穏やかに話しかける。

「あ、スタッフで結構です。みなさんも。

お昼はまだですが・・・。」

スタッフはそう言いながら、お腹空いてきたな、と腹部に手を当てる。

「よろしければ、わたくしと妹のお昼の残りがあるのですが、いかがですか？」

さすがお嬢様。 いや、感心している場合でもない。

もじもじとしたままだんまりな私を見て、シャナがしびれを切らして話しかける。

「じゃあ遠慮なく。

スタッフは編入って言ってたけど、魔法習ってたの？」

レベルとか属性とか分かってたら知りたーい！」

いきなり呼び捨て?!と少々シャナの言動に驚きつつも、同じく知りたい内容だったので

突っ込みたいのを抑えて耳を傾ける。

「はい、魔法は少し習ってました。

学校に通っていたわけではありませんが、知人のついで、基本くらいは。

僕は、Lv7の雷属性です。」

「「なっ・・・! らっ・・・!!」」

あわあわと私とシャナが取り乱す。

シャナは飲みかけていた紅茶を嘔き出さないように必死だ。

あまり動じないミフでさえ、目を見開いて右手を口元に持っていく。

ナヴィーンは何が起きたのか分かっていないようで、小首をかしげている。

「らいぞくせいいいー?！」

シャナが紅茶を飲みこんで、堪えきれず学校中に響き渡りそうな声で叫んだ。